

は、撰綿(セメン)、將軍(大黃)、甘草、桂枝、旃那(センナ)、苘根などの生薬についての調査や、幕末の売薬であるウルユスについての分析結果などが報告されている。

第4章では「宝物を彩るもの 一織布・紙に見る」として蘇芳、紫鑛、茜根、紫根、銀泥、丹、朱・辰砂、雄黄、密陀僧などの染色材、および包装材料についての調査、報告がなされている。

第5章では「香薬の材質調査から保存へ」として正倉院の構造や膏薬の収納と包装について触れられており、正倉院の宝物、香薬について文化財の保存という観点から提言されている。本書の副

題にも「材質調査から保存へ」とあるように、文化財の保存の重要性が諸所で訴えられている。ここには、第1次調査やその他の調査資料、文献を精微に検証したうえで、第2次調査に実際に携わった著者ならではの視点があるといえよう。正倉院の宝物、香薬とともに、本書に残された調査内容も後代に受け継がれてしかるべきであろう。

(鈴木 達彦)

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町355、TEL. 075(751)1781、2015年10月、A5判、440頁、10,000円+税]

島田保久 編著

## 『蝦夷地醫家人名字彙』

本書は北海道医史学研究会代表幹事の著者が明治期以前の蝦夷地といわれた時代の医家について、40数年にわたり道内外の史料を調査、研究した集大成である。

まず例言では利用に当たっての基本事項について解説している。蝦夷地とは和人地(道南の地域)と蝦夷地(狭義)を含む広義の地域を指し、さらに狭義の蝦夷地を東蝦夷地(太平洋岸の和人地から知床半島までの地域とクナシリ、エトロフなど)と西蝦夷地(日本海岸の和人地からソウヤを経てオホーツク海沿岸と知床半島突端までの地域)、文化6年(1809)幕府令により樺太を北蝦夷地と称し、蝦夷地を3区分した。地名は文化4年(1807)幕府令により蝦夷地を仮名または片仮名で呼称するとあり、本書では蝦夷地は片仮名、和人地は漢字で表記している。

蝦夷地の医家とは明治元年(1868)以前に蝦夷地に居住または渡来し足跡を残した医師の総称としている。収集した医家は530人にのぼり、個々の経歴について記述している。そのなかで松前藩医、町医、箱館奉行所の在任医師、御雇医師、立入医師、東北6藩から蝦夷地に派遣された陣屋詰医師、幕府の巡見使、採薬使に同行した付添医師、

アイヌに強制種痘をした種痘医に区分している。オホーツク海沿岸、クナシリ、エトロフ、北蝦夷地など北辺の地に越冬した藩兵、医師のなかに水腫病などによって死者がでていた。530人の医師の修学先は多くは渡海し東北、関東、関西地方と広域にわたっている。一部をみると、斎藤養達(津軽藩医)、伊東玄朴・貫斎、吉益東洞・南涯・北洲、緒方洪庵、坪井信道、荻野元凱、佐藤舜海・林洞海、吉田長淑、竹内玄同、多紀元簡、華岡青洲、山脇東洋・東海、香川修徳で昌平黌にも修学している。地元の箱館では深瀬洋春、田澤春堂、栗本匏庵のもとで教えをうけている。特記すべきことは箱館が開港されるとロシア病院の医師アルブレヒトのもとに下山仙庵、田澤春堂、深瀬洋春、永井玄榮など、後任の医師ザレンスキーのもとに深瀬洋春、永井玄榮、下山仙庵、高橋元斎、瀧野衝雲などが研修医となって就学している。修学先は時代とともに漢方医学から西洋医学に移っているようである。

巻末の主要参考文献は660、各種御用留などの文書は省略している。

北海道大学アイヌ・先住民研究センターの佐々木利和特任教授と北海道大学大学院文学研究科日

本史講座谷本晃久准教授は本書が北方文化史の分野にとって得難い成果とし、高く評価している。

(長瀬 清)

[自費出版, 2015年11月, A5判, 335頁, カラー3頁, 問い合わせは弘南堂書店, TEL. 011 (716) 9427]

二至村菁 著

## 『米軍医が見た占領下京都の600日』

歴史ノンフィクション物語として、二至村菁さんが書かれた『米軍医が見た 占領下京都の600日』を紹介、私見を加えて書評としたい。

著者は『エキリ物語』(中公新書, 1996年), 『日本人の生命を守った男 GHQ サムス准将の闘い』(講談社, 2002年)の2書をすでに世に問うている。二書ともに読ませていただいているが、著者が名づけた歴史ノンフィクション物語という領域が図書館学にあるかを知らないが、最も適した命名かもしれない。著者は客員研究員としてトロント大学科学技術史研究所に所属したが、本書により日本の戦後期の保健衛生問題そして行政、臨床医学につき発信をしている理由がよくわかった。登場者すべてを実名により書かれた本書によれば著者は京都にて1947年生まれ、感染症が猛威をふるっていた時代に育ち、家族そして自分も結核療養の経験を持つベビーブーマー世代の一員である。大学は日本での大学生生活に入ることを選ばず、米国Earlham大学とカナダMcGill大学修士課程を経て、その後同志社大学文学部、京都大学に学び、カナダToronto大学博士課程を修了している。日本の大学紛争の時代を経験していないことを述べている。

2009年京都で開催された第74回日本民族衛生学会総会の特別講演『戦後健康改革の原点—サムス准将の考え方』(民族衛生第75巻付録30-31頁)を行っており、評者はその機会に少し話をしたことがある。今回の著書を読み、同時代人として感ずるところを書きたい。なお評者は1949年生まれである。

本書は1947年秋から1949年春の間にGHQ京都軍政部に在籍したJohn D. Glismann (グリスマ

ン) 軍医中尉が経験した京都を中心とした医療保健事項の歴史である。グリスマンとその家族から提供されたカラー写真と手紙を主体に、それぞれに関係した人々からの取材と当時の記録を確認したノンフィクションである。物語の部分はその時代の明確な記憶をまだ持たない、幼児として生きてきた著者が語り部としてつむいでいるが、物語としてのフィクションはあまり多くないように思う。

終戦後の日本の保健医療の状況に大きな改革を行ったGHQ/PHWのCrawford F. Sams (サムス)の仕事については著者のほかにも、竹前栄次の『DDT革命』(岩波書店, 1986年)や杉山章子の『占領期の医療改革』(勁草書房, 1995年)などの高いレベルの研究がすでにされている。本書はグリスマン軍医25歳が、インディアナポリスの大学病院のインターン終了後の義務兵役として、米軍陸軍軍医部に入隊、極東勤務を希望しての来日、京都軍政部へ配属された600日間の経験をもとに書かれている。著者の1986年の京都府衛生部への取材によりはじまり、グリスマン医師の在所を探しての交流が得られたことによる。軍医が故郷の両親に京都から送った61通の手紙や、軍医の周りの日本人が直接軍医の両親に出した礼状、そして軍医本人から著者が譲り受けた、軍医撮影の京都での100枚を超えるカラースライドを手掛かりに進めた取材が、関係する日米での聞き取りを通して研究書となっていると思う。

25歳の軍医中尉は、日本占領軍の一員であり、日本においては運転手付公用車、メイド付宿舎、秘書付士官の立場であり、その眼を通してみた京都はそこに住んでいた人たちの日常からはおおき